

第12回 13回 講義 解答（コメント）

講師 佐藤邦政氏（敬愛大学国際学部国際学科准教授）

テーマ ルソーの「子どもの発見」

課題は、A～Cの課題のうち1つないし、複数でお答えください。字数は400字～1000字で、「課題・提出欄を通して武内にお送りください。

- A ルソーの教育思想の内容を説明しなさい。
- B 子どもの発達段階に応じた教育は、どのように行けばいいと思いますか。
- C 佐藤邦政氏の講義な内容から考えたことを書きなさい。

学生の解答 (いくつかの抜粋)

A

私は「佐藤邦政氏の講義内容から考えたこと」について述べる。私はルソーについて社会契約論しか知らないかったが多くの著書をしていることに驚いた。権力者と市民の差が大きかった不平等な生活があたりまえだった世界で、ルソーはただ一人で自分自身の描く教育論を掲げ、今現在の私たちのあたりまえの考え方へ影響を与えたことにとても尊敬した。あたりまえのことに反する意見、一般に反する意見を抱いていたとしてもそれを主張することはなかなか勇気のいることでとても困難である。ましてやフランス革命が起きる頃の自由な発言は、今とは比べ物にならないくらい制限されていた。そのなかで180度展開させた思想を述べたルソーは教育だけでなく人間の生き方というものに大きな影響を与えたと考える。当時、市民は自分たちの生活を支えるのに手いっぱいに子供を小さな大人として扱っていた。自分たちが生きていくために子供も労働力の一員にしてしまう考え方へ、そのような社会の背景をみると決して考えられないことではない。しかしルソーの考えた「子どもには発達段階があり、その時その時に適した教育がある」という思想は、当時の大人たちに子どもを見つめ直す新たなきっかけを作ったと思うし、子どもの発見につながった。エミールについて、今回私は初見だった。ルソーは自分自身の描く理想についてただ述べるだけでなく、架空の少年を用いて物語として人々に問いかけていったことは今の日本を変えていくための方法にも大いに生かせると感じた。これから子どもを指導し育てていく立場になるにあたって、その学年・子に沿った身に付けるべきことをサポートするような関わり方をすること、子どもの先天性を重視することなど教育をしていくうえでの基準にしていきたいと考えた。また、ルソーの乳児期の子どもの泣き声に敏感に反応していると最初は願いだったものが命令に代わり、暴君を作り上げてしまうという考え方がとても印象的だった。泣き声を聞くと誰しもが反応してしまうのがあたりまえだと思うが、適切な対応で子供の感覚を育てていくことが大切だと考える。「大人は子どもというものを知らない」という言葉を胸に留めて、今年中にエミールも読んでルソーの思想をより深く考察していきたい。

B

ルソーは当時の「子どもは小さな大人である」という考えを否定し、子どもは特有のものの見方・考え方・感じ方を持つ固有の存在であるとした。「自然にがれ」というように、人は自然な状態が望ましいとし、子どもは発達段階に応じた教育を受けるべきとした。よって、著書『エミール』では、子供に内在する

良さを認めその良さを自然の中で伸ばす個性的な教育論を展開している。

私は、養育者の子どもに対する理解と適切な行動によって教育を行えば良いと考える。まず、養育者が発達段階に応じた自然教育を十分にするためには、子育てに専念できる環境が必要だと思う。養育者にある程度余裕がある状態でないと、子どもと向き合えず発達段階を見極めることが難しいと考えるからだ。続いて、養育者が需要的な態度で子供と接し、子ども自身の発見を見守ることが重要であると思う。しかし、これは養育者が子どもの発達段階を理解しどきにはそれに応じた補助があることが前提である。そして、養育者は、発達段階に応じた課題を子どもに与えることで発達段階に応じた教育を達成することができると思う。

佐藤先生の講義や資料では、ルソーの思想や著書だけでなく、彼の生い立ちや彼が生きた時代の背景が提示されていて、理解を深めることができた。当時の西洋の子育ては私が想像していたよりも粗雑であるとわかり驚いた。そこで初めて、当時のルソーの思想がいかに異端であったかを知ることができた。彼自身は5人の子どもを孤児院に預けていたということにも衝撃を受けた。彼は一体どのような心境でエミールを著したのだろう。また、彼の考えをエミールから学び、現代の教育に一致している部分とそうでない部分があることを感じた。「子どもは小さな大人」と考えられていた時代と比較すると養育者の思考は自然教育に近づき、丁寧に子育てを行うことが一般的になってきている。しかし、共働きや経済的な問題から子どもと向き合う時間が十分に取れないなどの状況があり自然教育は困難で、強制的な教育になってしまふ部分があると思った。

C

ルソーの教育思想は人間の理性や道徳性を信頼して、それらを育成することに価値を見いだした。また自然状態における人間の自由な主体を育成することにも価値を見いだした。人間の自由な主体形成を目指したため、一切の強制や服従を否定し、自己保存、自己愛といった、近代自然法の原理によって、教育論を展開しながら、自由で自律的な主体形成を説いている。

子どもには大人の原理に置き換えられない固有の活動があり、自ら成長発達しようとする内在的な能力が備わっていることを説いた。よって子どもの内なる自然に従って教育を行うべきだと主張した。大人は知識や技能を一方的に注入するのではなく、子どもの楽しみを好意的に見守り、子どもの感性を大切にするべきだという消極的教育に重要な意味を見いだしていた。しかし、これは余計なことはせず、何もしないという意味ではない。自然が教える道に従って、子どもの感性を大事にすることが望まれている。

佐藤邦政氏の講義を受けて子どもの頃に受ける教育がいかに大切なかよくわかった。子どもの頃に悪い教育を受ければ悪い大人になるというように、子どもの頃に受けた教育でどのような大人になるか決まる。教育次第でその時代がよくなるか悪くなるかも決まってくる。

子どもには発達段階があり乳児、幼児、青年期など時代に応じて成長の区分があり、発達の違いに応じた教育的な関わりをすべきだという発想がある。乳児期は言葉を発することができないため、大人は子どもの鳴き声でミルクなのかオムツの交換なのか判断する。その子どもの鳴き声に応じて無制限にとりあつていると子どもをわがままな暴君になってしまうかもしれない。子どもの最初の鳴き声は願いである。気をつけていないと、それはやがて命令になる。というルソーの言葉からほどよい手助けをすることが大

人の役目であると感じた。

今まで何が教育かと尋ねられた時すぐに答えは思いつかなかったが、佐藤氏の講義を聞いて大人とは違う関わりをする子どもをサポートすることを教育というのだろうと思った。子どもに対してすべて手を差し伸べるのではなく、適切な対応をしていく必要がある。

D

佐藤先生、まず初めにこの度はこのような貴重な授業をしていただき、本当にありがとうございます。ルソーの教育論や『エミール』に記されている教育観について詳しく理解することができました。ルソーや『エミール』というフレーズは教師を目指しているということもあり、耳にしたことはありましたが詳しくは理解していませんでした。

私はルソーの教育論や『エミール』で伝えたかったことは、18世紀という時代ではありましたが現代でも大切なことであると思いました。親が自分の子どもに興味がなかったり、押さえつけで習い事をさせるなどの行為は子どもの成長を逆に妨げてしまうものだと思います。

また、私は今回の授業で「赤ちゃんを暴君にしない」「感覚と感情を育てる」という言葉がとても印象的でした。赤ちゃんと接する時から、その子のことを考えた行動を取るべきだという考えはさすがだなと思いました。赤ちゃんが泣いてしまうと、ついつい手を差し伸べたくなってしまい必要以上なことをしてしまうと思います。しかし、そうしてしまうと幼い頃から自分の言うことは全て叶えてくれるという、いわば暴君のようになってしまうということだと理解しました。三つ子の魂百までという言葉がありますが、やはり幼い頃からの教育や接した方が大切ということは、今も昔も変わらないのかなとも思いました。「感覚と感情を育てる」という言葉、特に感覚を育てることが重要だということも言っていました。感覚を養うために、その子の思いを汲み取って対応することが重要ですが、それがどれだけ重要なのかということを痛感しました。感覚や感情は生まれてもう備わっているものではありません。子どもにどのような教育を施し、身につけていくのかになると思います。

子どもへの教育が大切なこと、重要なことは誰しも知っていることだと思います。しかし、具体的にどのような心構えで接するのか、子どもの思いを汲み取れるかという具体的な教育論を展開しているのがルソーだと思いました。私も将来子どもと接したいと思っているので、先人たちの教育論もしっかりと学んでいきたいなと思いました。

E

私は佐藤邦政氏の動画を見て、新しく学ぶことが多くありました。高校までの社会科の学習で、教育思想というのは学びましたが今回のように一人に焦点を当てて学習するということはありませんでした。そのため、どのような思想なのかということだけ学習しました。しかし、今回の動画のようにその思想家の生い立ちから見ていくことで、どのようにしてその思想が生まれたのか、どういった背景があったのかということまで知ることができ、理解しやすい内容だと思いました。また、当時の社会状況も知ることでルソーは、なぜその考え方へ至ったのかということもより深く学ぶことができると思いました。

私も子どもの発達に沿った教育をすることで、スムーズに成長していく社会に進出できると考えます。

しかし、現代では親が子どもと常に寄り添ってあげられるかというと難しいと思います。佐藤氏のレジュメにもあった通り、夫婦共働きの家庭が増えてきています。その中でもやはり子供に対する親の愛情は成長していくうえでとても重要なものだと思います。ある程度成長するまではどの発達段階でも必要なものだと思います。その愛情をどうやって補填していくかが今後の社会の教育という点で大切になってくると思いました。

F

ルソーは、人間が最初から完全な姿で生まれてくるのなら社会の変化も進歩もない。子どもが未熟で未完成な存在として生まれてくるからこそ教育によって成長し、いまの大人を超えて新しい社会の担い手となることができるのだと述べた。

子どもの発達段階に応じた教育をするためにまずは、教師側が子どもの発達段階の詳細と年齢に応じた課題を理解することが必要であると考える。深い知識が無ければ教育を行うことは不可能であり、自分が担当する生徒たちの発達段階を分析するには土台となる知識が必要不可欠だからだ。次に得た知識と分析した生徒を基に課題を与えてみる（全教科）。そして課題への取り組みを見て現在の生徒の発達段階を観察し課題の難易度を調節していくことが良いと考える。なぜなら発達段階に応じた教育を行うためには難しすぎても簡単すぎてもよろしくないと考えたからだ。したがって、初めから発達段階に応じた教育、授業を行うことは難しいが観察と分析を重ねていくことで行えるようになると私は考える。

ルソーは教育を受けたのではなく転がり込んだ先の家の図書館で教養を身に付けたと言っていて満足に教育を受けられたのではなく独学だけで世界に自分の思想を伝えた。また後世にまで受け継がれるようなものを残せたのはすごいと思った。今の自分も社会状況のせいで満足のいく教育（学生生活）は受けることができないがインターネットで論文を読むなど少しでも自分の教養になるものを自ら身に付けていきたいと考えた。私の生活はルソーの時代に比べたら、比べ物にならないくらい便利で裕福であると思うので大学だけに頼らずできる範囲で自ら学ぶことを意識していきたい。

G

まずルソーがいた時代背景はフランス革命前夜、絶対王政の時代で、階級は硬直し、上流階級では子どもを大人のように振る舞わせることが最良の教育と考えられていた時代だった。しかしルソーはこのような考え方には反対であり。子ども見習い奉公としての小さな大人というより、子ども期という固有の存在価値があり、それに合わせた教育をしなければならないという価値観を世に提示しました。ルソーのこのような思想は現代日本で生きる我々にとっての常識にまで昇華しています。また文明に否定的で、文明的に人間の手が加えられていない状態を至高とするようなルソーの思想は「自然に帰れ」と常々要約されてきたがそれは誤りで、今の価値観を否定して自然な状態に戻すのは不可能だという前提の上で、正しい教育や文明の力で可能な限り人間をコントロールすべきだという主張なのです。またルソーの3種類の先生による3つの教育とあるように、子供がなにを求めているのか、またなにを発達させるべきなのか、発達段階に合わせてそれらが変わってくるし、子供自身は必要なものを知る術を持たないかもしれないから、そこを大人が適切に補助していくべきだ。というのがルソーの主張なのです。

300 年前の偉大な思想家について知ることができる講義は大変興味深いものでした。ルソー自身、自分の子供 5 人を孤児院に預けるという、もっとも自分には子供の世話ができないから、しっかりと生活させてもらえるであろう孤児院に預けるという考え方のもとでしているので、一概に無責任とはいえないのですが、かなり問題のあることをしているにも関わらず、思想は何世代にも渡って継承され続け、今では遙か彼方の島国の教育ですら彼の思想が常識となっている事実にとても驚きました。やはり大成する人物は様々な経験を積んでいるものだと考えさせられた講義でした。

H

ルソーの教育思想はかなり現代の教育の考え方と重なる部分があって、当時にはとての画期的な思想を持っていました。その教育思想とは、大人の考えを押し付けるのではなく、子どもの人間性に着目し、発達段階を踏まえ成長に応じた上での「育てる教育」が望ましいという考え方である。具体的には、すぐ説教したり判断を下すのではなく、子どもの状態を尊重するべきである。歴史の日付や歴代の人物を記憶させても子どもにとって意味がない。という考え方方が挙げられる。教師が考える判断の方向へ子どもを仕向けるのではなく、子ども自身が考えて行動することを尊重することで、子どもの心は育てられるのだというルソーの思いが感じ取れる。また、必要な歴史上の知識は生活していく中で覚えるため、強制的な記憶重視教育は必要ないという言葉は、今の教育にも言えることである。

このようにルソーの教育思想は、現代の教育の基本ともなる基盤部分が多い中で、現代教育の課題である問題点も指摘している模範的な教育思想である。

子どもの発達段階に応じた教育は、子どもの心の発達の習熟度に合わせる必要があると思う。教師は子どもの状態に応じて、学校生活内で取り入れることが求められる。例えば、低学年の子どもの教室では、遊びや活動を多く取り入れて友達を作ったり、学習内容を深めることが挙げられる。好奇心旺盛で四方八方に興味を持つ低学年にはたくさんのものに触れさせることでさまざまな考えを持ち、心の発達も促すことができるであろう。高学年の子どもの教室では、それぞれの子どもが問題解決の考えを持ち始めるため、行事での役割や決め事があれば子ども主体で進行して決めさせたり、授業内で討論会を用いて学習を深めることなどが挙げられる。また、揉め事があっても教師がすぐに仲裁に入らず、子どもだけで解決できるか見守ることも教育であると思う。

子どもの発達段階に応じると言ってもその子どもによってさまざまであるため、教師が子どもを目撃から観察し、子どものことをよく理解している必要がある。それを踏まえ、子ども主体となる発達段階に応じた教育が大切であると考えられる。

I

これまで中世の子供への教育の価値観は決して充実したものではなかった。この時代を生きたルソーの思想は教育界をはじめ、各界に様々な影響を与えた。

エミールによれば、発達の段階は 5 つに分かれており、子供の誕生の前後から、話す、食べる、歩く、などの感覚的発達、理性が芽生え、好奇心が生まれ物事の有用性を学ぶ時期、そして抽象的概念を考える完全性を持ち、教養を深めていく時期といったところである。

これを念頭に、ルソーの教育観は自然、人間、事物に分かれ、これら3つは互いを支え合っているのである。

佐藤先生の講義は大変有意義なものでした。大人は子供というものを知らない。教育者全員が知っている言葉とおっしゃっていましたが、私は初めて知りました。とても恥ずかしく思いました。もともと自分たちも子供だったはずなのになぜその時の子供心を失い、軽視してしまうのでしょうか。今一度子供たちならではのものの見方、大人をどう見てるか、繊細性に着目して今後の自分の教育観を改めてみたいと思いました。

J

子どもの発達段階に応じた教育を行うことは、子ども一人ひとりの個人差もあり簡単には出来ないことだと感じる。しかし、長年の研究もありある程度の教育の段階は見当がついていると考えられる。それとともに、個人差や成長の遅れなどを察知し発達の進路を正していくということも周りにいる大人の役目であると考えられる。講義内の動画でも取り上げられていた「できることにプラスαで少し負荷をかける」ことが成長に直結するということは、別の授業でも学んだ。つまり、いきなり大きな試練を与えて時間をかけて乗り越えさせるということより、小さな階段を一段ずつ上り、乗り越えていくということが成長における重要な要因であると考えられるとともに、発達段階に応じた教育にも結び付けることが出来ると思った。

ルソーという人間は教育心理学などの授業でも目にしたが、彼のような思想家がいなければ人間の道徳的価値観や、「子ども」という立場での人権なども今とは大きく異なっていたと考えられる。また、彼自らが育児を実践し、子どもの発達に対する常識や概念を覆したということは大変なことであると思った。今回の議題は子どもや乳幼児の時代にフォーカスが当てられているが、このような発達学習の理論はどのような年齢を対象にしても応用できる、基本的な理論であると感じた。自分自身が一人の教員となった際に、教師一人が生徒数十人をみるという条件のもと、生徒が一人でも学習の遅れが出てしまわぬよう、ありとあらゆる工夫をしなければならない。そういう際にもこの理論を軸にいか解决する手立てがあると考えられると思った。

K

ルソーは、子供のうちに子供の時にしか身に付けられないことを教育されるべきだという教育思想をかけている。大人は子供のうちに大人を求め、大人になる前に子供がどういうものであるかを考えないというような、大人顔負けに古典を暗唱させるといった上流階級で行われていた教育や、学校に通わせないで農業の家庭の子供であれば農具の使い方や稻の撒き方など、仕事でお金を稼いで生計を立てるためのスキルを身に付けることなどを批判し、子供はあくまでも子供の発達段階に応じた教育を受けるべきであるとした。子どもの発達段階に応じたその時に必要なことを、子ども自身が知らない可能性があるため、適切な教えをどんどん施していく関わり方が必要になってくる。ルソーは子供の内なる自然を尊重して教育を行うべきことを主張し、子供に対する大人の行き過ぎた指導や干渉を控えるべきことを説いた。

また、佐藤邦政教授の講義を聞き、ルソーの思想は支持できるものだと思った。子どもには子どもなり

の見方、考え方、感じ方があり、大人がそこに入り込んで大人の見方、考え方、感じ方を押し付けるようなことがあってはならないと感じた。大人とは違った存在として子供をとらえるべきだと考えた。

L

上流階級では堕落した生活をすることで子どもに悪い影響を与えててしまう。また、それ以外の家庭の子どもは見習奉仕としての小さな大人というような、自分たちの都合の良いように扱ってはいけない。そして、お金の稼ぎ方や働き方についての教育を行うのではなく、子ども期と呼ばれる固有の時期が存在するからその時期の固有の存在価値を潰してはいけないと、ルソーは考えた。このように、子どもの発見をした。そしてルソーの教育の思想として、高度な英才教育のように大人・親が望んでいるからと言って子供に自分の望みのように、難しい事やその他教育を子供に押し付けてはいけなく、小さい子どもが今いちばん何を求めているのだろう、何を発達させるべきだろうというように、子どもの発達段階に応じた教育が必要であるとした。そして、子どもに寄り添い、子どもの年齢や発達の状況をしっかりと見て適切な教育をすることが大切である。それに加えてルソーは子どもの存在を単なる無知な存在をして扱うのではなく、大人とはまた違った固有の活動・能力が備わっている存在とした。なので、子どもは未完成の大人として扱うのではなく、一人の人格をもった存在であることを導いた。またこのように子どもだからとは言っても決して甘やかすことはしないという思想も抱いていた。理由として、子どもに行き過ぎた指導や干渉をしてしまったら子どもの自然性を生かし、子どもの能力を伸ばすことができなくなってしまうからだ。それに加えて子どもの言う通りに親が動いてしまっても、成長するにあたって暴君並びに王様気分のひねくれた人格になってしまふ事を避けるためでもある。

佐藤氏の講義を受けて、これまでたんたんと幼稚園、小学校、中学校、高校と様々な先生や、友達、制度とともに生活していたが、それらは毎回、この時期、次はこの時期、ようやく我々の時期に応じて念密に教育が計画されていたのだなと感じた。また、このことはずっと昔のルソーという人間が発信して、それが日本でも取り入れられて教育に関わった先人たちによってもっと土台としてかたいものに構築されてきたから私たちがこうして成長できているのかなと考えた。

M

ルソーの教育思想の内容は、当時一般的であった大人顔負けの知識を持ち合わせ、親が直接教育しないで、乳母に教育を任せる当時の教育体制ではなく親が積極的に子供のことを考え小さな大人として扱うのではなく、子供として扱い自由を尊重し、子供の発達状態に応じた教育を行うことを推した当時常識を覆す教育思想である。

当時のフランス教育は子供を小さな大人として見られており、子供という概念が現代とは違う意味合いで知られていた。これらのことルソーは批判的であり、理由としてはルソーは大人のように知識を詰め込む当時の教育体制では子供は健全な心身の発展ができないと考えるからだ。エミールでは植物は栽培によって作られ、人間は教育によって作られると言われており、幼いころから優れた先生のもとできちんとした教育を受けることが大事だということが書かれている。そのように教育しなければ子供は周囲の悪影響を受け、将来立派に社会人として活躍できないようになってしまうという。

ほかにもルソーは教育体制だけでなく、教育の仕方についても言及しており、子供の発達段階に応じた教育をすべきだという。具体的に説明すると、5歳ごろまでの幼児期では「感覚・知覚」、13歳ごろまでの児童期では「好奇心・有用性」、15歳ごろまでの青年期では「理性・道徳」、20歳ごろまでの青年中年期では「幸福」、25歳ごろまでの青年後期では「女子教育論」のような教育課題に沿った教育論が展開されることが理想とされている。当時の子供の見方は罪深き存在として考えられていたが、ルソーは子供特有の人間性に着目し、成長段階に応じた指導を目指した。これらは当時の教育常識を覆す内容であり、社会に向けた極めて挑戦的な内容であった。現代では所々似た部分があるが、子供は偏差値によって区分されており、すべてが好影響な状態とは言えない。教育に対する議論が熱い今だからこそ現代の教育体制に対して見直し、悪い伝統はなくしていくべきだと私は考える。

N

ルソーは子どもに内在する良さを認め、その良さを自然の中で伸ばすという、当時では極めて個性的な教育論を展開した。

ルソーは「子どもには特有なものの見方、考え方、感じ方がある」ことを尊重した。当時、多くの子どもたちが五、六歳の頃から「小さい大人」として見なされ、労働に従事させられた時代であった。しかし、そのような教育では「子どもは成長して俗物の大人になる」とルソーは危惧していたのである。「俗物の大人」へと成長することを防ぐために、ルソーは「子どもの状態を尊重するがいい」と主張した。具体的には発達段階を「こども、青年、成人」の3つ、そして「こども期」を更に細かく3つに区切ることで、子供の教育の方向性を示した。つまり、ルソーは子どもの人間性に着目し、子どもの成長に応じた指導を目指したのである。そのような子どもの発達段階を踏まえ、二十歳過ぎまでの教育論を展開することは、当時の教育論としては常識を打ち破るような画期的な問題提起となった。しかし、ルソーの教育思想は、現代においても多大な影響を与えていているのである。

今回の講義では、ルソーの教育思想について学んだ。今回の学習を通して、現代でも多く見られる「教え込む教育」ではなく、子どもの発達段階を十分に考慮した柔軟な教育ができる教師になりたいと強く感じた。

O

子どもの発達段階に応じた教育を行うことは、子ども一人ひとりの個人差もあり簡単には出来ないことだと感じる。しかし、長年の研究もありある程度の教育の段階は見当がついていると考えられる。それをもとに、個人差や成長の遅れなどを察知し発達の進路を正していくということも周りにいる大人の役目であると考えられる。講義内の動画でも取り上げられていた「できることにプラスαで少し負荷をかける」ことが成長に直結するということは、別の授業でも学んだ。つまり、いきなり大きな試練を与えて時間をかけて乗り越えさせるということより、小さな段階を一段ずつ上り、乗り越えていくということが成長における重要な要因であると考えられるとともに、発達段階に応じた教育にも結び付けることが出来ると思った。

ルソーという人間は教育心理学などの授業でも目にしたが、彼のような思想家がいなければ人間の道

徳的価値観や、「子ども」という立場での人権なども今とは大きく異なっていたと考えられる。また、彼らが育児を実践し、子どもの発達に対する常識や概念を覆したということは大変なことであると思った。今回の議題は子どもや乳幼児の時代にフォーカスが当てられているが、このような発達学習の理論はどのような年齢を対象にしても応用できる、基本的な理論であると感じた。自分自身が一人の教員となった際に、教師一人が生徒数十人を見るという条件のもと、生徒が一人でも学習の遅れが出てしまわぬよう、ありとあらゆる工夫をしなければならない。そういう際にもこの理論を軸になにか解決する手立てがあると考えられると思った。